

City Life NEWS

全国で注目される施策や課題は、地域で暮らす私たちにどう影響するのか？身近に起きた出来事やトレンドなど、幅広い分野のニュースを紹介していきます。ネットでもさまざまなニュースを紹介しています。



シティライフNEWS
で検索

MONTHLY OF TOPICS

高槻市・榎田地区の町おこしに 「どぶろく榎田」第2弾 今冬発売

高槻市の榎田地区で育った「きぬひかり」を使用し、地元の人たちの手で作り上げた「どぶろく榎田」。今年3月に発売すると間もなく1,300本が完売するなど話題を呼んだ。製造元の高槻酒文化研究所(芥川3)の代表であり創業189年の老舗酒店「西田本店」(住所同じ)を営む西田直弘さんは「このどぶろくが、町おこしの一助になればうれしい」と話し、第2弾の製造に向けて準備を進めている。



「どぶろく榎田」第1弾を手にする西田さん。西田本店にて。



芥川商店街を抜けてすぐにある西田本店は創業189年



風光明媚な榎田地区(上2枚)と醸造所(左)。「どぶろくをきっかけに、ぜひ榎田地区に足を運んでみて下さい」と西田さん。今年度は友の会会員を募り、11月に見学ツアーを予定している。

「地元のどぶろくを残したい」 原から榎田へバトンタッチ

高槻市の原地区と榎田地区は2007(平成19)年に「どぶろく特区※」として認定されており、間もなく製造を始めた「畑中農園」のどぶろく「原いっばい」が長年親しまれてきた。しかし製造元の事情により2018年で生産中止に。西田さんは「地元のどぶろくがなくなってしまうのは、もったいない」と、存続させる方法を模索するも覆ることはなかった。そこで自ら有志を集めて会社を設立。榎田地区の農家と契約を交わし、近くに醸造所を建てた。酒類の製造免許取得など不慣れた手続きに奔走し、昨秋ようやく製造の目途が立った。コロナ禍の影響を受け、当初の予定より遅れて今年3月に醸造をスタートさせた。

「手探りの醸造 「初めてとしては100点」

ほぼ全員が素人だったため、造り酒屋の指導を受けながら手探りの醸造だった。醸造期間の3週間は毎日朝晩の2回、気温や室温をチェックしに榎田を訪れ、発酵の様子を見ながら混ぜ具合も変えていく。「生まれた子どもを育てるように、寒ければ毛布を巻いて、温かい時は扇風機を回しました」と振り返る。

出来栄えについて、「辛口ですっきり、キレがあってさわやか。どぶろくは酸味が強いといいますが、これは比較的柔らかい。初めてとしては100点だったのではないのでしょうか」と笑顔で話す。度数はやや高め17度だったが、「ありがたいことに、お客さんが『リキュールや牛乳で割って飲んだらおいしい』など、飲み方をSNSで

拡散してくれました」。第1弾は想像以上に評判を呼び、瞬間に完売した。

「情熱の源泉は 地元への思いと“ロマン”

70歳を超えてからの新たな挑戦。何が西田さんをつき動かしたのだろうか。「高槻のどぶろくを終わらせたくない、という気持ちが一番ありました。あとは、これまで小売の酒屋としてやってきた自分が、一度は作る側になってみたい、というロマンでしょうか。色々な人に声をかけて、『西田さんがそんなに言うなら』と協力してくれた。私1人では絶対にできなかったことです」。これまでも地元コミュニティの会長を務めるなど、地域振興に力を入れてきた西田さん。集まってくれた仲間と共にどぶろく造りという1つの目標に向かって情熱を燃やし、第1弾の完成にこぎつけた際は

喜びを分かち合った。

メンバーのほとんどが他に仕事を持つため、毎日のチェックが欠かせないどぶろく造りは今のところ年1回のみ。「まずは3年、しっかりいいものを作って広めていきたい。将来的には、冬から春にかけて2,3回作れるようになればと思います。そのうち、醸造に興味を持つ人も出てくれるとうれしいですね」と西田さんは話す。

※どぶろく特区とは
「濁酒(どぶろく)」の製造において、年間の製造見込み数量が6キロリットル以上なければ酒類の製造免許が取得できないところ、認定特区で要件を満たせば6キロリットル未満でも製造免許の取得が可能となるもの。高槻市では、構造改革特別区域計画「高槻・とかいなか創生特区」(どぶろく特区)が平成19年、大阪府で初めて認定を受けた。

「どぶろく榎田」(720ml)2,300円。今年の発売は12月5日から1,500本限定販売。西田本店で購入可能。予約受付中。問い合わせ先(072-685-0200)

SELECT

選者
山口 昭男
やまくち あきお

1955年 神戸市生まれ。1980年「青」に入会。波多野爽波に師事。2000年「ゆう」入会。田中裕明に師事。編集担当。2010年俳誌「秋草」を創刊し主宰する。毎月発行。句集に『書信』『讀本』『木簡』がある。2018年句集『木簡』で読売文学賞受賞。日本文藝家協会会員。

【俳句の応募方法】
氏名・住所・年齢・明記のうえ、ハガキ、封書、FAX、下記の応募フォームのいずれかから応募ください。

【宛先】
〒566-0001 大阪府摂津市千里丘1-13-23
株式会社シティライフNEWS 俳句係まで
FAX 06-6368-3505

【応募フォーム】
<https://pro.form-mailer.jp/fms/f413b102177160>

※締め切りは毎月25日必着 ※いずれも一人5句まで
※掲載は次々号となります
※佳作は掲載をもって発表とさせていただきます。
※お名前と作品を掲載します。

「つぶやき評」
俳句のひとつの形に取り合わせがあります。季語とものやことを合わせた形です。この俳句で季語が働かなければたんなる説明や報告となってしまいます。最適な季語を選べるように季語と懇るな関係を作っておくことです。

- 「佳作」
麦畑け緑の小径月におう 茨木市 毎熊 照子
木の葉髪使うは同じ皿小鉢 西宮市 宮部 志津枝
良い手紙悪い手紙も後の雛 吹田市 堀田 恵美子
冬山の裾を一両列車行く 吹田市 小澤 桔梗
ひとことを告げたき夜に萩こぼれ 箕面市 島崎 裕子

「秘めごと」は秘めごとのまま盆の月
このような内容が俳句なるのは、季語がすべてです。「盆の月」よいです。
茨木市 廣田 静子

「入選」
咸陽の戦どく吹く風の稲 京都市 筒井 安純
時空を超えて詠えるのも俳句が詩だからです。揺れている稲が印象鮮明です。
新涼や話相手の犬連れて 茨木市 河本 要
犬との関係がよくわかります。涼しくなった散歩道は気持ちよいものです。
携ふる母の葉や秋日和 豊中市 田村 由紀子
お母さんと一緒に行った病院の帰りでしょうか。秋日和がやさしいです。
団栗に目をとられつつ話す人 豊中市 佐々木 愛子
話に集中できない人。どうしても落ちていく団栗が気になるのでしょうか。

俳句
/
HAIKU

9月25日締切りでご投句いただいた中から、
山口昭男先生に入選作品を選んでいただきました。

「優秀賞」
仮縫いの糸はみずいろの小鳥来る 箕面市 高橋 真美

「入選」
季語「小鳥来る」は秋の澄んだ空を飛んでくる色とりどりの鳥のこと。この季語で秋の深まりが伝わります。そこにみずいろの糸。うまいなあと思えます。昔ながらの洋服屋を思い浮かべてしまいました。